

優秀賞

## 身近に

札幌国際大学 人文学部 4年 古川 絢菜

「〇〇前はいくらですか。」

私は街の景色を見ながら、耳でバスの運転手の声を拾う。昔からバスの独特な匂いは慣れず、正直バスは乗りたくない。それでも、進学で親元を離れ一人暮らしが始まると、どこへ行くにも避けられない手段となってしまう。「あー、今日座れたらラッキーだな」と思いながらバス停に居るのが日常となった。また、今となつて、バスの乗車時間が悪くも思えるようになった。バスの時間が自分の考えを整理する時間やこれからの目標、人との出会いを振り返る時間へと変わつていき、充実する空間になった。携帯を触るよりも、今日の運転手機嫌いいな。今日涼しいな。と思いながら、変わりゆく街並みを眺め、出来事を思い出すのが心地良く感じた。そんな日々で思い出す鉄板な出来事がある。

私は父を小学の時亡くし、母は女手一つで三人兄弟を育ててきた。どんな時でも子どもたちのことを考えてくれてることは、子どもながらに感じとつていた。母の背中を見てきた私は、理想とする人物は母であると胸を張つて言うだろう。親を理想とする子は少なくないと就活を通して感じた。だが、母の発言でこれからの生き方に腑に落ちたような、目指すべきものを見つけ出した。二〇一八年三月七日、一人暮らしの準備のため、新たな地で母と買い物をしてきた。何気ない会話をしている時、ふと「お母さん娘にお金を使えて幸せだ」と呟いた母がいた。兄も私も大学進学、妹は高校とまだまだお金がかかるというのに。母自身の買物もできていないことも知っている私は衝撃だった。その時の胸の高鳴りと顔の筋肉の硬直と目頭が熱くなり、涙が出そうになったのを覚えている。何故そう言えるのか、母として一人の人間として、私はまだとどかないところに居ると、憧れをもち、タイヤの振動に体をゆだね思い出すのであった。

今でもバスは私の歩む道を考えるきっかけをくれる。